水曜通信20

東北学院宗教センター編

2022年
9月

LIFE　LIGHT　LOVE

石河光哉画『シュネーダー肖像』
1936年以降制作
キャンバスに油彩
45×37.8cm
東北学院史資料センター蔵

解説は４頁をご覧ください。

異常気象に思う

この夏、仙台では曇りや雨が続き、晴れ渡る夏空がほとんど見られませんでした。近年、「異常気象」が平常のようになり、環境破壊の深刻さを感じさせます。

環境破壊に関して、神の似姿である人間に自然を支配させるという「創世記」の思想が人間中心主義的な自然観を生み出したと批判されることがあります。しかしこれは、天地万物を創造された神が世界の中心であるという「創世記」の基本的主題を無視した誤読・曲解と言わざるを得ません。神の命令に背いたアダムは、お前に対して土は茨とあざみを生えいでさせ、お前は自分がそこから取られた土に返るのだと告げられます。

人間の罪ゆえに、大地が人間の意に背くものとなるという思想は、『旧約聖書』にしばしば見られます（「エレミヤ書」12章4～5節など）。人間には、すべての自然物と同じく神に造られた被造物であるという謙虚さと、自然界の中で相対的に強い力を持つがゆえに、その力によって適切に自然を管理すべきであるという責任感がともに求められているのです。

東北学院宗教センター所員（大学宗教主任）　木村 純二

次回：第55回水曜公開礼拝（公開オンライン礼拝）
10月第１週配信予定
学校法人東北学院ホームページをご覧ください。

【第１部　礼拝】
説教：藤野 雄大（大学宗教主任）
奏楽：小野 なおみ（礼拝オルガニスト）

【第２部　音楽による賛美】
演奏：小野 なおみ

第54回 水曜公開礼拝報告（説教：鐸木 道剛、奏楽：菅原 淑子）

2022年７月20日（水）　公開オンライン礼拝

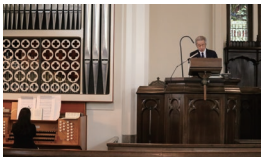
讃 美 歌：452番「ただしくきよくあらまし」
聖　　書：コリントの信徒への手紙二10章７節－10節
讃 美 歌：453番「きけやあいのことばを」
説　　教：「信仰なき我を助け給え」
頌　　栄：544番「あまつみたみも」

【説教要旨】

パウロは「ひとりでは力強いが、人に対すると弱くて、話も面白くない」と言われていました。このエピソードは信仰の重要なポイントに関わります。信仰とは、大工の息子であるイエスをメシアであると信じることです。それは躓きであり愚かです（「コリントの信徒への手紙一」1：23）。だから悪魔に憑かれた息子の治癒を願う父親が言います。「我信ず、信仰なき我を助け給え」（「マルコによる福音書」9：23）。しかしパウロはその信仰の弱さを誇ると言います（「コリントの信徒への手紙二」12：9）。内村鑑三も、「幾ばくかの真実（some Truth）を知っているが、すべての真実（all Truths）を知っているわけではない、その不完全の自覚が他者への寛大（liberality）の基礎である」と書いています（「余はいかにしてキリスト教徒となりしか」）。信仰の確信はあくまで主体的で個人的なものであって、他者の信仰を否定するものではないことを忘れてはならないです（「コリントの信徒への手紙一」13：7）。マルチン・ルターが「キリスト者は、主人であると同時に奴隷である」と記すのはそれゆえです。

（理事長特別補佐〈宗教センター担当〉鐸木 道剛）

前　奏：作曲　J.S.バッハ（1685－1750）作曲
コラール前奏曲《天にいます父なる神よ》BWV682
後　奏：作曲　J.S.バッハ（1685－1750）作曲
フゲッタ・スペル《我らは皆一人の神を信ず》BWV681



バッハは1793年にルターの「小教理問答」Der kleine Katechisumus（1529）の内容に基づくカテキズム・コラール６曲を基に12曲（大小２曲）を含む、全27曲からなるオルガン曲集：「クラフィーア練習曲集第III巻」を出版しました。

《天にましますわれらの父よ》BWV682は同曲集の１曲で、トリオのスタイルの上にルターの「主の祈り」のコラール旋律がオクターヴのカノンで加わる複雑な書法で書かれています。

「われら皆唯一なる神を信ず」によるフゲッタBWV681は、６曲のカテキズム・コラールの中からの第２曲「信条」を示しています。

（礼拝オルガニスト　菅原 淑子）

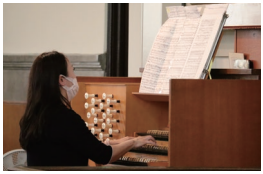
礼拝後、音楽による賛美（オルガン：菅原 淑子）

J.S.バッハ作曲　クラフィーア練習曲集　前奏曲とフーガ 変ホ長調 BWV552

この作品も、同曲集「クラフィーア練習曲集第III巻に収められる冒頭の前奏曲と終曲のフーガです。

前奏曲は205小節におよぶバッハの最長の前奏曲で、最初の輝かしい軽快な付点のリズムは、フランス古典の作風が見られます。

フーガは５声部から成るオルガンのために書かれた唯一の三重フーガで、変ホ長調の調号♭（フラットが３つ）で書かれ、３つの主題と３部分で構成（4/4拍子・6/4拍子・12/8拍子）されているため、キリスト教の「三位一体」を意味するものと考えられます。このフーガはイエスの母、聖マリアの母、聖アン（アンナ）の旋律が用いられていることから《聖アンのフーガ》と呼ばれ、特に第１フーガは神聖な響きに満ち溢れています。



バッハの数ある「前奏曲とフーガ」の中でも、圧倒的なスケールの勇壮さを持つ、輝かしい傑作品です。

（菅原 淑子）

宗教改革者カルヴァン（1）現在のジュネーヴ

宗教改革者ジャン・カルヴァンと言えば、16世紀にドイツのルターに続いて、スイスのジュネーヴで宗教改革を行い、福音主義（プロテスタント）のキリスト教を確立した人物であることは周知のことでしょう。カルヴァンについてはいろいろな評価や見解がありますが、今回からしばらくこの紙面でジュネーヴの様子やカルヴァンの活動などをお話しする予定です。カルヴァンの教会観は、改革派教会あるいは長老主義教会と呼ばれますが、東北学院の二人の校祖であるW.Eホーイと D.Bシュネーダーはドイツ改革派教会から派遣された宣教師ですから、カルヴァンを学ぶことは、本学のキリスト教のルーツを確認する作業にもなります。初回は現在のジュネーヴの様子について触れておきます。

皆さんは西ヨーロッパの山々でも最高峰の「モンブラン」という名前はどこかで聞いたことでしょう。このモンブラン山に登頂するためには、登山者たちはジュネーヴから出発します。ジュネーヴはヨーロッパの内陸では最も大きい湖の西側に位置し、山と湖に囲まれた風光明媚な景色と古い時代から交易や交通の要衝としてにぎわってきました。

地理的にはフランスの領土内に位置していながら、独立精神の強かったこの町は16世紀に近隣の町々が独立する様子に刺激され、プロテスタントのキリスト教を導入して独立すると、1815年にスイス連邦に加わるまで孤高を保ち、その後国際連盟、国際連合の活動拠点となりました。16世紀のカルヴァンとどうつながるのかという素朴な問いが生じますが、これからの紙面にご期待ください。

（宗教センターチャプレン　野村 信）

― 建築が語る東北学院の歴史（12）―

礼拝堂の内部には、控えめながら壁面にレリーフが施されています。そこには数種の図象が使用されていますが、代表的なものの１つに、四葉飾り/quatrefoilがあります（図１，２）。外周が円形のもの（図１）は単独で使用され、天井に見える梁型の頂点と両端に見られます。礼拝堂の天井（屋根）は緩い勾配の山型（二等辺三角形）になっていますので、三角形の頂点と両裾にこの図象が施されていることになります。また、外周が方形のもの（図２）は横並びに使用され、例えば東西のバルコニー席を囲う三方の壁の上部に確認できます。

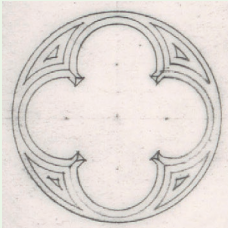


図１：外周円形の四葉飾り
（設計図をトリミング）

シンボルとしての四葉飾りは、宗教・時代・地域の違いを超えた広がりを有していることが知られていますが、特に建築装飾としては、ゴシック～ルネサンスの時代に発展したと言われます。主を表す四文字ヤハウェYHWH、最初の人間を表す四文字アダムAdam、四人の福音史家、これらはいずれも「４」と関係します。もとより十字形は、キリスト教においてこの上ないシンボルで、東北学院の校章（TG章）にも使われています。

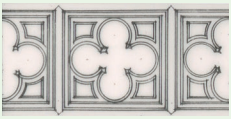


図２：外周方形の四葉飾り
（設計図をトリミング）

永遠性や完全性を示す「円」が「４」つ組み合わされて、四葉飾りは出来上がります。そしてこれが礼拝堂において多用されています。この場所でキリスト教の教えが語られ、ここが本学の精神的な中心であることが示唆されています。

（工学部　﨑山 俊雄）

「三浦綾子生誕100周年というカイロス（機会）に」

20世紀の日本のキリスト教文学界を牽引した作家三浦綾子氏（左上図）は1922（大正11）年４月25日に北海道旭川市に生まれ、1999（平成11）年９月に77歳で逝去しました。今年2022年は三浦綾子が生まれてから丁度100年を迎えました。そのため、今年は全国各地で三浦綾子生誕100周年を記念するイヴェントが企画され、出版物も数々刊行されています（左下図）。

東北学院大学ではこの機会を活かし、９月の秋季特別伝道礼拝に、三浦綾子文学記念館の特別研究員であり、全国各地で行われている三浦綾子読書会の代表を務める森下辰衛氏をお招きし、聖書と三浦綾子の文学作品についてお話を伺います。学内の学生向けのリモート動画配信となります。

わたしも大学１年生の春にはじめて三浦綾子作品を読み、２年余りで三浦綾子の作品をすべて読破するほど、三浦文学に魅了されました。三浦文学が描き出す人間模様をとおして、聖書が示す罪や愛の意味を深く考えさせられました。生誕100周年を迎え、今なお色あせることのない三浦文学の魅力に、21世紀を生きる若い学生の皆さんもぜひ触れて欲しいと思います。

（宗教センター主任　原田浩司）

美術による賛美（14）石河光哉

石河光哉『橄欖山より眺望』1967年３月29日
絹に水彩　37×90.5cm　長崎県立美術館蔵

本学所蔵の『シュネーダー肖像』を描いた画家は石河光哉（いしこみつや 1894-1979）。油絵らしからぬ抑えた色彩で、平面的に着彩する点は、前回このコラムで紹介した布施信太郎が描く肖像画に近い。同じく日本的油絵を試みていたものと考えられる。

石河は長崎に生まれ、1908年に長崎鎮西学院に入学と同時に受洗。その後、青山学院で学び、1913年、内村鑑三の今井館に出席。内村鑑三のアドバイスに従って、職業人となるべく東京美術学校洋画科に入学。風景画と肖像画を描き、また聖地エルサレムに1926年以来４度赴いて（「聖地画行脚」）聖地の風景を描いた。また『西欧宗教名画集』（飯田十字館）全13冊を出版（1925-26年）して、聖書を題材とする西洋美術を紹介した。長崎県立美術館には、石河の作品が資料を含めて324点所蔵されている。

石河光哉画『藤井武先生』
キャンバスに油彩
60.6×45.3cm
1965年
長崎県美術館蔵

今井館にある内村鑑三の肖像画が有名であるが、他にも同時代の指導的キリスト者の肖像画を多数描いている。シュネーダー先生の肖像画もそのひとつ。石河は、内村鑑三の信仰のキーワードである「仰瞻（あおぎみる）」に従って、旅人として生きた画家であった（堀孝彦「内村鑑三と画家・石河光哉」『「内村鑑三」と出会って』勁草書房、1996年）。

（理事長特別補佐〈宗教センター担当〉鐸木道剛）

いのち　ひかり　あい

東北学院スクールモットー
LIFE LIGHT LOVE（いのち・ひかり・あい）

東北学院宗教センター編「水曜通信」
第20号
2022年９月７日発行
〒980-8511　仙台市青葉区土樋１-３-１
発行責任者：宗教センター主任　原田 浩司
東北学院宗教センター　TEL：022-264-6558
Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp